

## 第61回日本小児保健協会学術集会 シンポジウム2

## 子どもの健康と情報通信技術 (ICT)

## 最近の情報モラルに関する問題

—必要とされていること—

坂 元 章 (お茶の水女子大学)

インターネットにおけるトラブルを避けるため、子どもに情報モラルを持たせることが必要とされている。情報モラルとは、情報社会で適正な活動を行うためのもとになる考え方と態度と定義され<sup>1)</sup>、とくにインターネットがもたらす問題性に対応する力と言える。

子どもに情報モラルを持たせるとしても、インターネット・トラブルに関する変化は速く、必要とされる情報モラルや取り組みもそれに連動して変化するので、最新の状況を把握しておくことが重要である。そこで、本稿では、最近とくにその必要性が高まっているとみられる情報モラルの内容について7つを取り上げて解説する。

## I. 低年齢者の情報モラル

携帯電話は、一時期、急速に低年齢者に普及したが、その後しばらく変化のない状況が続いてきた。しかしながら、最近では、インターネットに接続できる機器の多様化によって、低年齢者がインターネットを使用するようになってきた。

かつては、インターネット接続は、主としてパソコンと携帯電話で行われてきたが、今日では、ゲーム機や音楽再生プレーヤーなどからでも接続されるようになってきた。携帯電話やスマートフォンをまだ持っていない低年齢者であっても、こうした「隠れ接続機器」を持っていることは少なくなく、これを通じてインターネットが使えるようになってきた。

このインターネット使用の低年齢化は、インターネット・トラブルの低年齢化も引き起こす。実際に、

こうした機器を介して、小学生が性犯罪被害を受ける事例がみられている。

従来の携帯電話では、未成年者が使うものについては、原則としてフィルタリングが自動的にかけられていたが、隠れ接続機器やスマートフォンでは、基本的に保護者自らが何らかの対策をしない限りは、有害情報が遮断されない。また、隠れ接続機器でインターネット接続が可能なことを、保護者が認識していない場合もある。

このように、接続機器の多様化によって、インターネット使用が低年齢化したうえに、環境がさらに危険になっている面があり、保護者の取り組みを促すとともに、子どもに対する低年齢からの情報モラル教育が重要になっている。

## II. 過剰使用に陥らない情報モラル

スマートフォンの普及に伴って、子どもの長時間利用が目立ってきた。スマートフォンは、携帯電話に比べ、大画面であり、高性能であり、さらに、LAN回線も使用しやすいことなどから通信速度も速い。そのため、ゲームやコミュニケーション・アプリなどにおける魅力的な使用が可能になっており、没入している子どもは少なくない。

コミュニケーション・アプリについては、自分が発信したメッセージを相手を読んだかどうか分かる「既読通知機能」を含んでいるものがあり、それが相手からメッセージを受けたら直ちに返信しないとイケないという規範を強めているとみられている。この規範のため、子どもは、すぐに返信しようと、常時、友

人からのメッセージの受信を見張ることになる。

ゲームや、友人とのコミュニケーションの他にも、スマートフォンの性能の良さや通信速度の速さは、動画の視聴を始めとしてさまざまな用途での長時間利用をもたらしている。

こうした長時間使用や没入は、それが過剰になれば睡眠時間や学習時間などを奪うとともに、歩行中や自転車の運転中などにおける「ながら使用」を招く。これは、注意散漫による危険な状況をもたらす。さらに、会話中や食事中的の使用であれば相手に対するマナー違反となる。

インターネットは使用すればするほど、その使用をコントロールすることを難しくさせ、その自己コントロールの欠如がさらに長時間使用をもたらしうる<sup>2)</sup>。このサイクルに陥らないように、自らのインターネット使用を適切に管理できる情報モラルが必要とされている。

### Ⅲ. 個人情報やプライバシー情報を守る情報モラル

従来、個人情報やプライバシー情報は、ひとたびインターネットを通じて発信されれば、誰に渡っていくかわからず、また消去することも困難であることから、その発信には慎重である必要があったが、スマートフォンの普及によって、さらに慎重でなければならぬ状況になっている。

スマートフォンでは、自分で撮影した写真を送ったり投稿することが容易になっており、その写真に含まれている情報を手掛かりにして発信者の氏名、学校、住所などを特定できる場合がある。自分が何気なく発信した写真から自分が特定され、ストーカー被害や性犯罪被害を受ける危険性がある。親しい間柄であると思って送ったり共有していたプライベートな写真が知らずとも公開されてしまう事態も起こっている。

また、スマートフォンの設定によっては、写真の中にジオタグと言われる位置情報が含まれ、その写真をどの地点で撮影したかがわかるようになっている。もし、家の中から撮影した写真を公開してしまえば、自分の住所が特定されてしまうことになる。

さらに、個人情報やプライバシー情報を勝手に発信してしまう不正アプリがある。通常は、そうした発信をすとしても、事前にユーザーに対して許諾を求めてくるが、その説明をよく読まずに承認しているユーザーは少なくない。

このように、スマートフォンでは、個人情報やプライバシー情報に対する新しい脅威がいくつもあり、従来以上に、これらを守る姿勢や技能が必要とされている。

### Ⅳ. 発信内容の安全性を確認する情報モラル

自分で撮影した写真を発信することが容易であるというスマートフォンの特徴は、不適切投稿と呼ばれる事態も生み出している。

例えば、自分がアルバイトをしているレストランの冷凍庫に入り込み、その姿を撮影した写真をツイッターに投稿した事件がある。この写真を批判するコメントによって炎上が起こり、店も行為者も大きなダメージを蒙った。

こうした行為は、しばしば、他者を楽しませるための投稿ネタを探すことに端を発する。最初は、問題のないものであったとしても、それが称賛されるに従って徐々にエスカレートし、最終的に、自分でネタを無理に作るなどして、行き過ぎた内容の投稿をするに至ってしまう。冷静であれば不適切投稿の問題性を認識できたとしても、気持ちが高ぶっており、しかも、投稿の作業が簡単にできるために、つい行き過ぎてしまう。

写真は、こうした炎上や個人の識別を招いてしまう危険があり、これらを送るときには、一息ついてその安全性を確認できることが重要になっている。

もちろん、写真に限らず、著作権侵害の恐れがある画像、犯行予告や誹謗中傷などになりうるメッセージ、個人情報を含んでいたり推測させるメッセージなども、その発信について十分慎重にならなければならない。

### Ⅴ. 集合的情報モラル

以前は、ブログや掲示板など不特定多数の他者にも開放されている場でのトラブルが注目されたが、最近では、スマートフォンにおけるコミュニケーション・アプリの爆発的な普及によって、仲間内でのトラブルが目立つようになっている。

従来、インターネット・トラブルに対応するために、家庭でのルール作りなどが行われてきたが、それは基本的に保護者それぞれの子どもに対する取り組みであった。しかしながら、仲間内トラブルについては、個人の情報モラルだけではなく、仲間内で共有された

情報モラル—集合的情報モラル—が必要になる。

例えば、コミュニケーション・アプリの使い過ぎを咎められ、保護者からその使用を禁止された子どもが、他の子どもからの怒りを買って、仲間はしに遭う事例がみられている。こうした問題に対応するためには、保護者が自分の子どもだけに対して取り組みを進めても不十分であり、グループメンバーで使用するルールを共有することが必要である。

集合的情報モラルの形成のため、子ども同士でルール作りを行わせることや、学校や行政が情報モラル教育にさらに取り組むことが重要になっている。

## VI. 行動を導く情報モラル

今日では、インターネットにはどのような加害や被害の内容があるかは、子どもの間にもかなり知られており、子どもが有すべき情報モラルは次の段階に入っている。

一つには、そうした知識を実際の行動に結びつけられることである。子どもの中には、知識を得ても、そうしたトラブルは自分には関係ないと楽観的に捉え、実際の行動を慎重にしない場合があるとされる。どのようにして、子どもの行動変容を実現するかが課題となっている。

座学形式による講習や授業は、知識の獲得にはよいものの、行動変容のためには、座学だけでなく、演習形式の講習や授業が有用であると言える。行動変容のためには、コミットメントが重要とされており、例えば、今後、自分が情報モラルに従った行動をすることを他者の前で宣言をしたり、他者に対して情報モラルに従った行動をするよう説得することは、自分の行動を変容させることに効果的とみられる。こうしたことは、演習形式の講習や授業で可能になる。

また、最近、子どもが自分たちでルールを相談して作る取り組みが注目されている。これは、集合的情報モラルを形成する意味を持つとともに、作られるルールは、子どもが自己決定したコミットメントのあるものとなるので、子どもがそれをよく守ることが期待される点でも有用性があると考えられる。

座学のための教材はかなり発達しており、今後は、行動変容を目標とした演習のための教材や指導方法についても開発が進むことが望まれる。

## VII. トラブルの背景や過程を理解した情報モラル

すでに加害や被害の内容について一定の知識を持っている子どもにとって、そうした加害や被害に至る背景や過程を理解することも、次に望まれる段階である。

例えば、先述したように、不適切投稿は、気持ちの高ぶりや投稿作業の簡単さによって起こりやすくなっている。不適切投稿を十分に防ぐためには、不適切投稿そのものの内容ばかりでなく、気持ちの高ぶりや投稿の簡単さなどの背景や過程も合わせて理解させることが効果的と考えられる。

他の例としては、インターネットが見知らぬ人との出会いの機会となり、それによって子どもが性犯罪被害を受けるトラブルがある。加害者は、最初、被害者の女子と近い世代の女子になりすまして、被害者とやり取りをする。そして、やり取りの間に、徐々に被害者の個人情報や、他者に知られたくない情報などを巧みに入手し、十分な情報を得たところで、それを保護者に知らせたり、不特定多数にばらまくと脅して、被害者に更なる情報や実際に会うことを要求する。弱みを握られた被害者は、加害者からの要求を拒むことができなくなり、最終的に性犯罪被害を受けていく。知らない人と会ってはいけないことは聞かされていても、こうした脅迫の過程などを理解していなければ、被害は防げない場合がある。

## VIII. 最後 に

以上、最近その必要性が高まっているとみられる情報モラルの内容について紹介した。インターネット・トラブルは変化が速く、また、先端的なツールやサービスでトラブルが起こるため、子どもの健康や安全に関わる専門家は、インターネット・トラブルに関する知識や技能を頻繁に更新することが求められるように思われる。

## 文 献

- 1) 文部科学省. 教育の情報化に関する手引. 2010.
- 2) Kumazaki (Yamaoka) A, Matsuo Y, Sakamoto A, Akiyama K, Adachi N, Naito M, Kurie I, Sakamoto K, Takahira M, Yonezawa N. The Effects of Internet Use on Internet Dependency, Psychological Health, and Interpersonal Relationships. *Journal of Socio-Infomatics* 2011; 4 (1): 17-27.